THE GALLERY

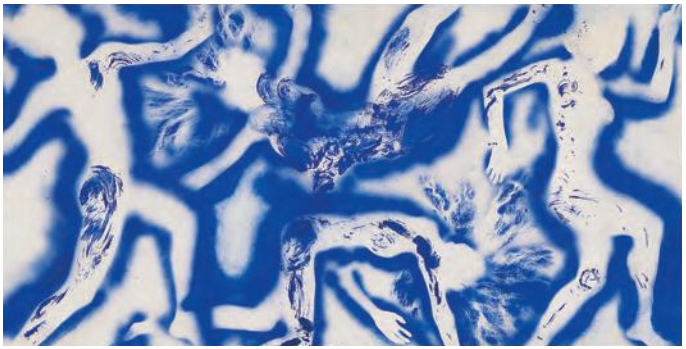
もくじ　■特集｜コロナ禍後の展覧会、みどころ　その１：第２弾「体験！いわ美Ⅱ 見て・考えて・表現して―体験する現代アート」
その２：「いわき市小・中学生版画展」今昔、そして未来。
■企画展｜「民藝 MINGEI―美は暮らしのなかにある」　■常設展示室から　■今後の展覧会

特集｜special issue ―コロナ禍後の展覧会、みどころ

その１：第２弾「体験！いわ美Ⅱ 見て・考えて・表現して―体験する現代アート」

9月9日（土）より開催する「体験!いわ美Ⅱ 見て・考えて・表現して―体験する現代アート」は、令和元年に開催した「見て・考えて・表現して 体験!いわ美―コレクションによるアートプログラム（以下、体験!いわ美展）」の第2弾です。「体験!いわ美展」は、現代アートを見てアートプログラムに参加し、難しいと言われがちな現代アートの面白さを味わってもらう展覧

モーリス・ルイス《Gamma Beta》 1960年
「にじませて描く」プログラム



イヴ・クライン《人体測定 ANT66》 1960年
「その時の形をのこす」プログラム

会でした。会場では、クイズを解くために作品をじっと見つめる親子、作品について言葉に表すためにいろいろと話し合う家族、プログラムに夢中で取り組む子どもたちといった、いつもの美術館の展示室とは違った光景が見られました。子どもたちの入場が多い展覧会でしたが、平均で約2時間、最長で6時間3分と展示室の滞在時間が長いことと、アンケートの満足度が非常に高いことが特徴的でした。

第2弾となる今回、タイトルとねらいはほぼ同じですが、内容は少し変更しています。前回、作品作りに夢中になってしまい、作品を見て、深く考えることを忘れてしまう参加者も見られたことから、「見る」「考える」ことにさらに重点を置いた内容となっています。作品を描いたり作ったりするプログラムの面白さはそのままに、そして、「見る」「考える」をより深める内容のプログラム構成になりました。

プログラムは全部で11あり、作品や作者に関するクイズに答えたり、作品の技法を体験したり、作品を見て感じ考えたことを言葉に表したりするプログラムに参加できます。すべてのプログラムを紹介したいところですが、紙面の都合でここでは3つ紹介します。

まず、最初に紹介するのは「にじませて描く」プログラムです。下地塗りを施さないカンヴァス（綿布）に薄く溶いた絵具をにじみ込ませて描く「ステイニング」という技法があります。1952年にフランケンサーラーがはじめ、モーリス・ルイスや丸山直文などもこの技法を使って描いています。この技法を使って布製のバッグに思い思いの絵柄を描く技法体験。絵具の色が微妙に混ざりあったり、ぼんやりとした表情になったりと偶然性をともなうこの技法を、作者がどのように使っていたのか追体験することができます。

次に、「その時の形をのこす」プログラム。イヴ・クラインは《人体測定 ANT66》で、紙の上にモデルを寝かせ、その上から絵具を吹き付け、その時のモデルの姿形を画面に定着させました。日本の力士の手形や魚拓、原爆の放射線熱で焼き付けられた人間の影などから影響を受けたと言われています。画面の上に実際に人はいないけれど、人がいたことが分かる。この不思議な関係を、実際に、ホワイトボードとペンを使って体の輪郭を実際になぞってみて体感してください。作家がねらっていたものに気が付くかもしれません。

そして、最後に紹介するのが、「アートクイズ―見て、考えて―」プログラムです。定番のクイズで、ピカソやシャガール、ルオーなどの7作家15作品を見て、題名や作者を当てます。もちろん、作品の周りにはヒントがあるので、よく見て、感じて、考えれば、100点満点も不可能ではありません。

3つのプログラムを紹介しましたが、この他にも、普段の展示室では味わえない様々なプログラムがあります。作品を「見て」、「考えて」、「表現して」、これらの体験を通して現代アートの面白さを、ぜひ味わってください。

（普及係長　江尻英貴）

その２:「いわき市小・中学生版画展」今昔、そして未来。

当館が1984年の開館以来開催を続けている「いわき市小・中学生版画展」は、今年で40回目を迎えます。今やお正月の風物詩ともいえる版画展は、市内の小中学生が過去1年間に制作した版画作品を美術館で展示公開することで、日ごろの学習の成果を広く市民に紹介するとともに、児童生徒が表現行為への興味と喜びを体験する中で創作意欲の向上を促すことを目的とした展覧会です。さらに言えば、「地域の美術館として市内への美術の普及に努め、いわきの新しい美術文化創造の拠点となる、と同時に、今日の美術を世界的な視野で収集し、将来への遺産とする」当館の運営の基本方針（特に前半）を、いわきの子どもたちの作品を真ん中に据えて体現した展覧会といえるでしょう。

そもそも、なぜ「小・中学生」だったのか。

なぜなら、小学生と中学生が参加する「小・中学生版画展」と高校生以上の市民が参加する「いわき市民美術展覧会（市美展）」を年間計画に入れることで、美術館は、小学1年生以上の全ての市民が自分の作品を展示することのできる場所となり得ると考えたからです。これは同時に、身近な人たちの作品を鑑賞する機会となることに繋がり、相乗的に美術に対する興味を広げることが期待されます。

では、なぜ「版画」だったのでしょう。

それは、心に浮んだイメージを実現しようと彫刻刀やバレンなどの道具を駆使する版画の制作過程における子供たちの創意工夫に着目してのことでした。さらに、学校でも美術館でも仕上げた作品、出品された作品に一切の選択や審査をおこなわず、賞の設置を避けることで、児童生徒の中に無意識のうちに植えつけられる優劣の意識を取り払うという企図は、以降40年間守り続けている本展の背骨です。

第1回展のポスター
（デザイン:滝田清栄）

開館年度、41校から1,750点の出品でスタートした時点で、既に出品点数の増加と展示スペースの限界をどのように打開してゆくかが次回以降の課題とされており、出品点数と展示のバランスは現在まで引き続く大きな課題となっています。

当初、出品点数は大きく右肩上がりで推移しました。しかし、2000年ごろには、児童生徒数の減少、図工の時間数削減などから緩やかな減少傾向に転じ、2011年の東日本大震災、2013年の美術館大規模改修工事による休館、さらにここ3年間のコロナ禍で減少傾向に拍車がかかり、昨年は参加校27校、出品点数1,252点まで減少し、40年前を下回る水準になっ

第1回展会場風景

第1回展会場風景

第6回展会場風景(1989年度)

第7回展会場風景(1990年度)

ています。(次頁グラフ参照)

とは言え、出品される版画はどれも素晴らしく、その1点1点がかけがえのない作品たちです。紙版画、木版画、そして個人作品、共同作品と技法も手法も様々な作品たちの出来映えもさることながら、それぞれの作品からは、下絵を描き、仕上がりを想像しながら版をつくり、インクを付けて紙をのせ、バレンで刷るという版画制作のプロセス、そして、紙をめくって自分の作品と出会った時の子どもたちの目の輝きまで読み取ることができます。

また、現場の先生方には、学校での版画制作の指導の他に、作品の募集方法やポスターの制作など、版画展の運営にも積極的に携わっていただき、美術館と学校の連携という側面でも、大きな役目を担っている展覧会といえるでしょう。

40回目を迎えた本年度は初心に帰り、出品者数の減少を挽回すべく「いわき市小・中学生版画展プラス ―版画の力―」と銘打ち新たな試みを加えて版画展の新たなステージを模索します。

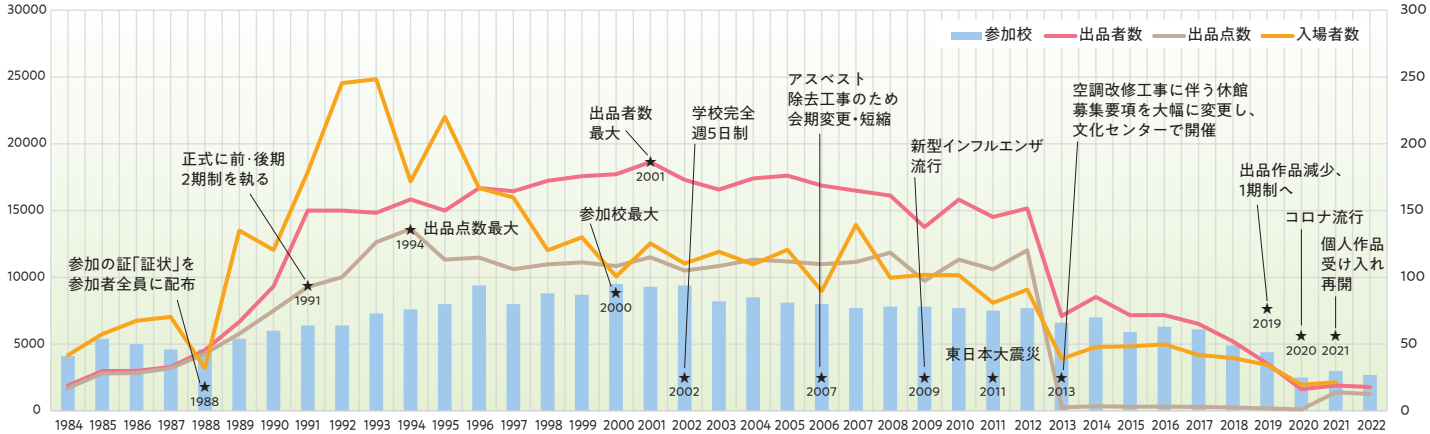
具体的には、展覧会に先駆けて学校を会場にして専門講師による版画ワークショップ「版画展プラス 先生のための版画技法研究会(木リト技法)」や「版画展プラス 教室でリトグラフに挑戦!」の開催を通して先生も子どもたちも新しい技法にチャレンジする機会を創出します。また、所蔵作品による小企画「版画展プラス マティス×ピカソ」、歴代ポスターや記録写真などで版画展の軌跡を振り返る「版画展プラス 版画展40年のキセキ」を同時開催することで、子どもたちと一般の美術愛好家が、ともに版画の魅力、版画の力を堪能できる展覧会を

第39回展ポスター(2022年度)

第39回展会場風景(2022年度)

第39回展プリントコーナ＆版画の広場

小・中学生版画展参加者・出品者数推移



目指します。

今回の展覧会が、子どもと美術館、美術館と学校、そして10年後、50回目の「いわき市小・中学生版画展」を見通す小さな機会になれば幸いです。

（学芸員　植田玲子）

企画展｜民藝 MINGEI ― 美は暮らしのなかにある　10月28日（土）～12月17日（日）

約100年前に思想家・柳宗悦（やなぎむねよし）は日常生活のなかで用いられてきた手仕事の品々に美を見出し、「民衆的工藝=民藝」の考えを唱えました。日々の生活のなかにある美を慈しみ、素材や作り手に思いを寄せる「民藝」のコンセプトはいま改めて必要とされ、私たちの暮らしに身近なものとなりつつあります。本展では、民藝について「衣・食・住」をテーマにひも解き、暮らしで用いられてきた美しい民藝の品々約150件を展示します。また、いまに続く民藝の産地を訪ね、そこで働く作り手と、受け継がれている手仕事も紹介します。さらに、昨夏までセレクトショップBEAMSのディレクターを務め、現在の民藝ブームに大きな影響を与えてきたテリー・エリス/北村恵子（MOGI Folk Art ディレクター）による、現代のライフスタイルと民藝を融合したインスタレーションも見どころのひとつです。柳が説いた生活のなかの美、民藝とは何か、その広がりといま、そしてこれからを展望する展覧会です。

（学芸員　伊藤圭一郎）

（上から）《緑黒釉掛分皿》因幡牛ノ戸 1931年頃　《流描皿》河井寛次郎 京都 1927-28年頃　《藍哲絵後者器》濱田庄司 栃木 1935年頃　いずれも日本民藝館蔵
Photo: Yuki Ogawa

常設展示室から

戸谷成雄《森》
1988–1991年
木、灰、アクリル彩
213.0×490.0×30.0㎝

三木富雄《耳》
制作年不詳
アルミニウム
12.0×143.1×49.8㎝

令和5年度後期の常設展のテーマは「あつまれ！　彫刻の森」。いわきにある彫刻作品といえば……当館正面玄関前に鎮座するイギリスの彫刻家ヘンリー・ムーア《横たわる人体・手》を思い浮かべる方も多いのではないでしょうか。街中に目を向ければ、いわき駅前大通や湯本駅前には、「彫刻のある街づくりプロジェクト」によって制作、設置された彫刻作品群が見られます。また公園、学校、あらゆる公共の場所で彫刻を目にする機会もあるでしょう。見る者と同じ、現実の三次元空間の中に存在し、空間を共有する彫刻は、実は絵画と比べても身近な存在であると言えるかもしれません。本展では、現代美術のコレクションの中から、彫刻の可能性を追求した作家たちを紹介します。

戸谷成雄（1947年-）は、60年代に「もの派」といった革新的な美術動向が台頭し、一度解体された彫刻という概念に改めて向き合い、「彫刻とは何か」を追求し、精力的に活動を続けてきた彫刻家です。出品作《森》は、80年代に始まる作家の代表的なシリーズの一作。林立する木材の表面は、電動チェーンソーによって溝をつけられ、抉（えぐ）られ、複雑で荒々しい襞（ひだ）を作り出しています。はっきりとした量塊（りょうかい）を持つ伝統的な彫刻とは異なる、彫刻とその外部の曖昧な「境界」を生み出す本作は、新しい彫刻のあり方を提示していると言えるでしょう。

その他、「耳」の彫刻作品を繰り返し制作した三木富雄（1937-1978年）の《耳》、「せんとくん」でも知られる籔内佐斗司（やぶうちさと し）（1953年-）のかわいらしい作品《犬モ歩ケバ…》など、常設展示室に彫刻作品が集います。「彫刻の森」に足を踏み入れ、作品と空間を共有してみませんか?

小企画は、収蔵作家特集。後期Ⅰは今年2023年に没後30年を迎える彫刻家、若林奮（いさむ）を、後期Ⅱは現代美術家、河口龍夫を特集します。

（学芸員　徳永祐樹）

後期　「あつまれ！　彫刻の森」
　2023年10月17日（火）-2024年4月14日（日）
後期Ⅰ　「収蔵作家特集：若林奮」
　2023年10月17日（火）-2024年1月21日（日）
後期Ⅱ　「収蔵作家特集：河口龍夫」
　2024年1月23日（火）-2024年4月14日（日）

今後の主な展覧会のご案内

企画展

体験！いわ美Ⅱ
見て・考えて・表現して―体験する現代アート
令和5年9月9日（土）～10月9日（月・祝）
民藝 MINGEI―美は暮らしのなかにある
令和5年10月28日（土）～12月17日（日）

いわき市小・中学生版画展
令和6年1月5日（金）～1月28日（日）
第53回いわき市民美術展覧会
〈書の部〉令和6年2月9日（金）～2月18日（日）
〈絵画・彫塑の部〉令和6年2月23日（金・祝）～3月3日（日）
〈陶芸の部、写真の部〉令和6年3月8日（金）～3月17日（日）

常設展後期

あつまれ！　彫刻の森
令和5年10月17日（火）～令和6年4月14日（日）
後期Ⅰ　収蔵作家特集：若林奮
令和5年10月17日（火）～令和6年1月21日（日）
後期Ⅱ　収蔵作家特集：河口龍夫
令和6年1月23日（火）～4月14日（日）

2023年9月1日発行　編集・発行　いわき市立美術館　☎0246-25-1111　〒970-8026 福島県いわき市平字堂根町4-4